報告

まず大人が変わらんと・・・日本のフィールド教育

京都大学フィールド科学教育研究センター 助教
上野 正博
うえの まさひろ

1951年河内生まれの湘南ボーイ。フィールド科学教育研究センター発足時から現職。専門は水産海洋学。日本海沿岸域の環境と生物のかかわりについてあれこれと調べているが、要素主義に陥った近代科学を否定し、日本海とそこに暮らす生き物（人間を含む）を丸ごと理解しようとして泥沼にはまっている。

報告

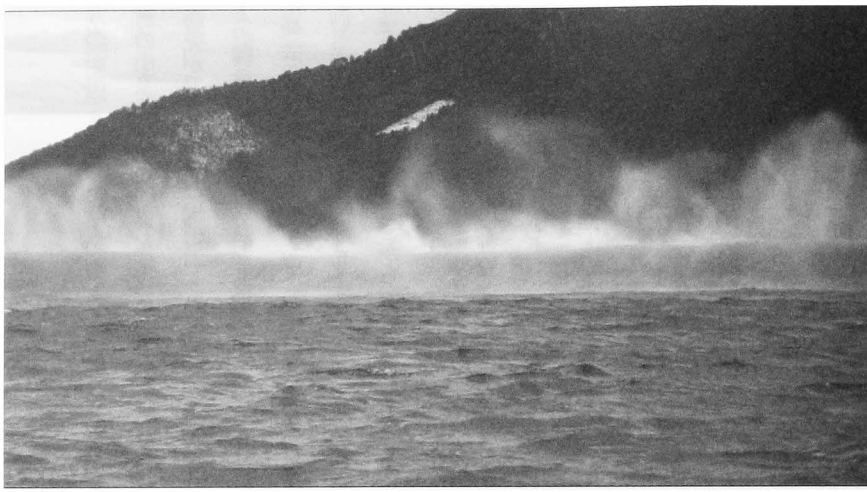
まず大人が変わらんと・・・日本のフィールド教育

もう四〇年、ずっと舞鶴水産実験所でやっております。子どもの頃から山とか川に行っていて、そのまま今日に至っているという人間です。

これ、昨日撮った写真ですが、由良川の河口です。芦生の研究林から日本海へ注ぐ、京都府で日本海へ注ぐ川ではいちばん大きな川です。田中先生の指導で、学生達がヒラメの研究を始めたのもここです。世界的にもヒラメの稚魚の研究で有名なところです。今日と同じように、昨日もすごくいい天気だったので、絶好の調査日よりなんですけど、ちょっと天候が変わると、こんなふうになります（写真①）。大波が崩れていて砂浜も見えない。こうなると、ここに行って水をくむという仕事はできない。これでも、まだ比較的穏やかな日なんですよ。冬になるとこんな日がごく普通になります。すると、その日の調査は翌日に延ばす。あるいはまた、別の日に行くと。

日和りまかせの野外調査に耐えられない学生が増えている。

この実験所では、私が担当しているだけでも、夏場ですと週に三日か四日、冬でも週に二日くらいは野外調査をやります。予定をずらしていると、どんどん他の調査が入ってくる。ですから、私の手帳には一応予定が書いてありますけど、訂正だらけで、何を書いているか分からないということがよくあります。で、この二〇年、バブルが崩壊した頃から、そういうことに耐えられない学生がすごく増えてきました。舞鶴に、わざわざ大学院で来る学生、今も十五人くらいいますけれども、そういう学



写真①

生は逆に、そういうことに平気な者が多いですが、京大全体としてはすごく減ってきていて、ここが担当している野外実習の参加者がだんだん減って、じり貧になっています。

それがなんで起こったのかなあということを、少し考えてみます。私は一九五一年の生まれですが、その頃から現代に至るまで、少し世の中のことを考えてみました（図①）。ここは、電化製品、どんなものが出てきたか。一九五三年に白黒テレビの放送が始まって、それからまあいろんな、三種の神器とかいわれるようなものもあって、どんどん普及していって、九〇年代に入ると携帯電話、Windowsのパソコン、ペットボトル、ユニクロ、100均とか、

2000	1990	1980	1970	1960	1950
食洗機 薄型テレビ カメラ付き ケータイ 電子ブック	ケータイ Windows PETボトル UNIQLO 100均	パソコン ファミコン ウォークマン コンビニ	クーラー 自動車 ラジカセ	カラーテレビ 掃除機 スーパー	白黒テレビ 冷蔵庫 洗濯機 電気釜
世界的な 金融危機	バブル崩壊	日米自動車 摩擦	減反政策 変動相場制	公営団地 住宅ブーム 人口流出	高度経済成長 公害 炭鉱争議

管理計画文明	自己家畜化文明
危機管理　予定調和 情報化　自己奴隷化	ホモサピエンスの誕生から始まり 農業の発達とともに加速？

図①

こういうのが出てきました。そのあと、二〇〇〇年を超えると、これはあの小泉さんの言っていた新三種の神器、まだまだ日本はこれで商売ができるんだといっておられましたが。

で、下の欄は、高度経済成長があって、団地ができて、田舎から人が都会へ流れて行ってしまって、田舎は減反政策でますます人がいらなくなって、弱っていきます。この辺で変動相場制。ここまでは一ドル＝三六〇円。ここから、だらだらと円が強くなっていったわけです。

世の中は実は、この一番下に書いてある、イヤな言葉ですけれども、自己家畜化文明、これがホモサピエンス＝人類が誕生したときから始まって、農業が発達してきたのに伴って、どんどん加速してきたんじゃないかと言われています。まずその話をひとつ。家畜というのはどんなものかというと、人間が用意して管理している空間の中でしか生きていけない。食料が自動的に供給されるので自分で餌を探せない。自然の脅威から遠ざかる。家畜は人間によって品種改良されていく。当然、ブクブクに太った豚とか、ばかでかい牛とかのように、非適応的な形態になる。家畜にされると、動物の身体に違いが出る。さらに繁殖を管理される。

たとえば、犬ですね。もともとはタイリクオオカミが原種といわれ、そこから分かれてきた。これは、わが家の愛犬の桃太郎です。こんな風に変わっていく、同じ動物とはとても思えない。これなど、体は顔の大きさより小さい。肩高が一〇センチに満たないミニチュアチワワから一メートルを超えるグレートデンとか大きさだけでも違うし、形もずいぶん変化がある。豚でも、豚はもともとイノシシ、世界中あちこちのイノシシからできていますけれども、イノシシに比べると顔がずいぶん寸詰まりになる、体毛がなくなる。ところが自然に放してやると、これが野生化した豚ですが、元のイノシシに戻ってくる。

人ホモサピエンスの誕生から始まった自己家畜化文明。

人類を見ますと、明らかに家畜動物とある程度共通した特徴がある（図②）。この人、アイクシュテットという人は、純粋な人類学者です。昭和の初めの頃、一九三四年に言い出したのですが、家畜化という言い方がすごく抵抗が大きいので、ものすごく

人類には
野生のものには見られない、
家畜動物とある程度共通した
特徴が見られる

アイクシュテット1934

- 体毛の減少
- 巻き毛・縮れ毛の出現
- 椎骨数や四肢骨の変化
- 皮膚の色素の増減
- 顎の退縮＝小顔化

図②

反発を食らったらしいのです。言っていることは至極まともなことで、体毛が少なくなった。巻き毛とか縮れ毛、くせ毛ができた。骨の数が変わってきた。皮膚の色素が増えたり、減ったり。これは、人間とチンパンジー、人類に一番近い類人猿であるチンパンジーの骨ですけど、ご覧のように、アゴが退縮して、小顔になっている。これはすべて、家畜化という言い方を人類学ではします。

ある遺伝子で人類の系統を調べると、アフリカでまず人が生まれて、それがアフリカ脱出を果たして、白人が誕生して、白人から黄色人種、あるいはポリネシアンとかオーストラリアのアボリジニに分かれます。見たら分かりますように、もともとアフリカの人は黒人ですね。これが白人になって、黄色人種になる。それからオセアニアに行った人たちは黒人風になってしまう。ですから、最近の遺伝子の研究の成果からでは、人種というのはほとんど無意味であると言われています。それぐらい形態変化をしていくと、家畜化されていっているということになります。

その自己家畜化ということを、もう一度脚光を浴びさせたのは、動物学者の小原秀雄さんとか、映画監督の羽仁進さん、それから国際日本文化研究センターの尾本恵市さん、人類学ですが、この方達が「どうも今の文明というのは、自己家畜化文明じゃないか」と。「自分をあたかも家畜のように、自分で管理しちゃうんですね」と。こういうことを言い出す（図③）。一九七〇年代の終わりぐらいから九〇年代にかけて。特徴としては、文明に適応することで野生を失って、文明社会に飼い慣らされている。一方で、科学技術が発達しますから、生活はすごく便利になって、長寿社会になる。ところが、人間としての感性が

だんだん鈍化していって、免疫のシステムが崩壊しつつあり、抵抗性がすごく弱くなる。総合的な体力が落ちていっているのじゃないかと言われている。

自己家畜化文明　小原秀雄、羽仁進、尾本恵市など

自己をあたかも家畜のように管理する人類

文明に適応することで野生を失い
文明社会に飼い馴らされ
科学技術の発達により生活の利便性が向上
長寿社会を実現した

▼

・・・しかし

▼

人間としての感性が鈍化
免疫システムが崩壊しつつあり抵抗性が弱化
総合的な体力の低下

図③

二十一世紀になって、失敗を許さない人生を追求する管理計画文明に入った。

また、先ほどのところに戻りますけど、自己家畜化というのは、人類の歴史とともにずっと進んできたのですが、ついにこのあたりで究極のテーゼになってしまって、二十一世紀になってこれを超えちゃったんじゃないかというのが最近言われています。管理計画文明です（図④）。これは倫理学者の森岡正博さんが提唱されて、川那部浩哉さんなども同じようなことを、超自己家畜化というような言い方で、ちらっと言っていますが、どんなのかというと、危機管理などにやたらうるさくなって、予定調和的な人生、やたら情報化されている、自己奴隷化していると。まあ、この辺はどうも、パソコン、携帯、その辺の便利なものが出てきたのとすごく関連しているような気がします。

少し説明しますと、管理計画文明というのは、人間が自分たちを都市というものに閉じ込めてしまって、都市から離れられない。今、日本では八割以上の人が都市に暮らしていますけ

れども、どんどん都市に人が集まってしまった。それによって、苦痛が少なくて、快楽の多い人生の選択。それから、自分の予期したとおりに、予定調和的に進む安定した人生。したいことがなるべくできる人生。逆に、したくないことはなるべくしなくてもよい人生というものを獲得した。まあ、これだけ見れば悪いことはないような感じがしますが。でも言い方を変えれば、失敗を許さない人生の追求。ですから、外れてしまえば終

管理計画文明

人間は自分たちを
都市という檻に閉じ込めることで

苦痛が少なく快楽の多い人生

自分の予期したとおりに進む安定した人生

したいことがなるべくできる人生

したくないことはなるべくしなくてもよい人生

を一歩一歩獲得してきた

失敗を許さない人生の追求

図④

わりになる。具体的に言うと、こんな感じになるのですね。

さらに、今までだと、自分の部屋の中だけの人工環境、あるいは職場が人工環境だったのですが、どんどんそれを外にまで持って行ってしまった。目はケータイをずっと追い、あるいはテレビゲームを追い、耳はウォークマン、鼻は、まさか鼻に栓はできませんから、周りに対して無臭であれと要求する。菌というのは危険だから、無菌というのがやたらうるさく言われて。どこもかしこも無菌にしたがる。抗菌グッズをいっぱい使う。極端な人になると、皮膚の常在菌まで除菌したがる。すごくバカなことですね。皮膚の常在菌というのは、皮膚の平方センチメートルに一〇〇万個くらいいるのですから、除菌なんか絶対できないですね。でも、除菌したがる。人工の環境で、絶対安全なところに閉じこもりたがる。

私はケータイを持たない、すごくきらいなんですけれども。学生に、ケータイは便利かと質問すると、すごく便利だと。待ち合わせで迷わないと。これというのは、明らかにおかしいです。同じ駅の東口と西口で待ち合わせていたり。初めての街に行くのに、地図を眺めてあれこれ考える、そういう楽しみが何

もない、そういう楽しみをすべて放棄している。便利さと安全性だけ優先して、ドラマがない。これ、イヤミですけど、間違いなくいえるのは、ケータイを使うようになってから、すごくいい加減な待ち合わせをする人がものすごく増えています。電話でしゃべりながらだから、三〇分くらい平気で遅れる。危機管理というのも、実際のところ、集団無責任体制にしか過ぎない。

高度成長期にも、それなりの余裕があった。いまは、裁量労働制に代表される自己奴隷化の時代だ。

最後に、究極の問題がこれだと思うのですね、自己奴隷化してしまう。今さら言うまでもないですが、派遣や請負が急増して、正社員は過密労働が当たり前になってしまった。前川レポートというのがありましたけど、儲かるところ以外は、みんな外国から輸入すればよいと。近頃では、労働者をグループ分けして、こういう人たちは裁量労働制だとか、大学の先生もそうですけど、週に四〇時間、自分の好きな時間に働けばいいという、まあすごく格好いい制度なのですが、実態はサービス残業そのもの。サービス残業を合法化して、長時間労働を常態化するということです。こんな状態にあったのでは、野外調査なんていう非効率で予定が立たないような仕事に、子どもたちが興味を持つというのは、かなり難しい。それに対して、大人の方がせめてＮＯという体制をつくっていかないといけないのではないかと思います。

先日、作詞家の星野哲朗さんが亡くなられて、久しぶりに「365歩のマーチ」というのを聴いたのですけれど、あの歌、中学生の頃きらいだったんですね。何か、高度経済成長を一生懸命追いかけているみたいで。でも、あらためてよく聴いてみると、三歩進んで二歩下がる、のですね。一日一歩ずつですから、週休二日だと、週に一歩しか前に進まなくてよい。イケイケドンドンの高度経済成長の時代でも人々にはそれくらいの余裕があった。ところが、今の世の中というのは、週に五日働いたら五歩進め、へタすると七歩進めという、それが当たり前だと。こういう世の中に対して、大人がまずＮＯと言わないと、フィールドのことなんてどうしようもないんじゃないかと言うのが、今日のお話です。

どうも、失礼しました。